

国立感染症研との連携協定から3年

感染症制御プラットフォームの構築目指す

医学検査学科 山本隆敏講師



国立感染症研究所病原体ゲノム解析研究センターと本学医学検査学科/生物毒素・抗毒素共同研究講座との連携は2021年から始まりました。当初は新型コロナウイルスゲノム解析と破傷風菌ゲノム解析でしたが、2022年からは「熊本県を中心に九州で分離・同定した病原体の遺伝子学的解析に関する研究」の課題名で共同研究契約を結び、他の細菌・ウイルスゲノム解析についても連携しています。

連携では環境や臨床等で採取した検体から本学で病原体を分離し、協力して同定・解読・解析を行い、2023年12月には生物毒素・抗毒素共同研究講座の志多田千恵共同研究員を中心とした研究論文「Comparative pathogenomic analysis reveals a highly tetanus toxin-producing clade of *Clostridium tetani*

isolates in Japan」が国際ジャーナル誌に掲載されました。

医学検査学科（衛生検査所）では国立感染症研究所での新型コロナウイルスゲノム解析技術研修を経たことを評価いただき、熊本県・熊本市の両行政とPCR検査以外でも密に情報共有をすることができ、熊本県からのゲノム解読依頼を受託・実施することができました。

また、衛生検査所機能を活用し、熊本県内の病原体のゲノム解析による情報を共有することで迅速に公衆衛生上のリスクを察知し、感染症の制御プラットフォームの構築を目指しています。その足掛かりに、現在、口腔内細菌叢・腸内細菌叢なども視野に疾患や予防医学に関連した調査体制、医療機関等との提携による病原体ゲノム解析体制整備を行っています。

ようこそ熊本へ

タイ・コンケン大
交換研修生を歓迎

本学の学生、教職員と記念撮影するコンケン大学の教員・学生たち（前列左の4人と右の3人）

本学との交換研修のために来熊したタイのコンケン大学の学生ら7人のウェルカムパーティーが3日、1204・1205会議室であり、心づくしの料理を囲んで両大学の学生、職員らが交歓しました。

一行は1日（土）に熊本入り。2日（日）は阿蘇観光を楽しみました。パーティーでは、コンケン大生らが本学の学生、教職員に拍手で迎えられながら入場し、「こんにちは、皆さん」などと一人一人が自己紹介。竹屋元裕学長が「2週間の研修期間中、病院施設の見学や授業参加もあるが、それとともに友情も育んでほしい」と歓迎のことばを述べ、

「チャイヨー」とタイ式の乾杯の音頭で歓談に入りました。

日本に来るのは初めてというムジマー・ノッパヴィンさん（看護3年）は「熊本は自然が素晴らしい。研修期間中、海外に知られていない日本文化をもっと知りたい」と目を輝かせていました。一行は15日（土）までの期間中、病院や企業見学、本学授業への参加、文化交流など多彩なプログラムを体験しています。6日（木）にはキャンパステラスで、引率するモーリン・ウォングワッターナーグン講師による講演会もありました。

（NL編集部）

令和6（2024）年度の海外派遣留学プログラムの派遣者がこのほど、決まりました。派遣者は昨年と同じく、タイ、韓国での3プログラムで計20人です。

韓国・大邱保健大学で毎年開催されるGlobal Student Leadership Program（8月9～17日）には、各学年から1人ずつの計4人が参加。大邱保健大学との交換研修（8月14～24日）には各学科・専攻から2人ずつの計10人、タイ・コンケン大学との交換研修（9月7～20日）には医学検査学科、看護学科、リハビリテーション学科理学療法学専攻から各2人の計6人が派遣されます。

本年度は3プログラムに計62人が応募。競争率も3倍を超える「狭き門」となりました。大邱保健大学での交換研修に臨む緒方萌恵さん（理学療法学専攻4年）は「人やモノに積極的に触れながら、外の世界のことをたくさん知りたい」、コンケン大学に派遣される西村衣純さん（同1年）は「タイのリハビリ技術を学び、新たな知識を吸収し、国際水準で温熱療法の研究に挑戦したい」と抱負を語っていました。

（NL編集部）

養成講座での経験をクラスに

リーダー学生 始動

全学必修科目「アカデミックスキルⅠ」

全学必修科目「アカデミックスキルⅠ」（1年次生）で、リーダー学生の授業サポートが5月30日（木）に始動しました。リーダー学生は、放課後の養成講座で得た経験を各クラスに持ち帰り、クラスメイトの学習を支援する役割を担います。

現在「アカデミックスキルⅠ」では「小学生にからだの一部について説明しよう」というテーマに基づき、グループ単位でプレゼンテーションの準備作業に取り組んでいます。初の授業投入に緊張の面持ちのリーダー学生たちでしたが、クラスメイトと触れ合う中で徐々に呼吸をつかむと、授業の後半では生き生きとした表情でクラスを巡回していました。

リーダー学生で看護学科1年の東名美咲さんは「養成講座での自身のつまずきの経験が、他のクラスメイトにもぴたっとはまって、自然と手を差し伸べることができました。養成講座での学びが身になっていることを実感できて嬉しかったです」と、笑顔で語ってくれました。

（アカデミックスキル支援センター 松尾健志郎）



リーダー学生を交え意見を交わす看護学科の学生たち

言語聴覚士教育における専門職としての自己効力感向上プログラムの開発

科研費 ★★ 私の研究

向上の過程明らかにし離職予防にも期待

若手研究
2024-28年

リハビリテーション学科
言語聴覚学専攻

池寄 寛人 准教授

私の研究では、言語聴覚士教育における専門職としての自己効力感を向上させるためのプログラムの開発を目的としています。

自己効力感の変化は行動の変化に先行するとされており、自己効力感を向上させることで専門職としての行動変容を促すことができます。言語聴覚士教育における専門職としての自己効力感については、横断的研究にて臨床実習や実習前客観的臨床試験の効果が報告されているものの、自己効力感が育まれる過程は明確にされていません。そのため、言語聴覚

士教育における専門職としての自己効力感を向上させるツールやプログラムはないのが現状です。

専門職の離職願望との相関もみられ、行動変容を促すプログラムを開発することで離職の予防にも繋がると考えられます。よって、本学のP&Pの助成を受けて我々が開発した言語聴覚士自己効力感尺度を用いて縦断的調査を行い、所属施設別に評価することで言語聴覚士教育における専門職としての自己効力感を向上させるための具体的な手立てを得ることができると考えています。



校区自治会総会で「熱中症対策」講話

夜間も注意…症状や初期対応法を説明

2日(日)、熊本市中央区本荘校区4町内自治会の総会において、熱中症対策啓発の講話を行いました。町内役員、各班班長など計12人が参加しました。

熊本県の2022年度の熱中症による救急搬送人数は、人口10万人あたり89.4人で全国4位です。講話では、温度や湿度を確認したうえでの行動、テレビやスマートフォンによる情報収集、環境省LINE公式アカウントなどプッシュ通信型の熱中症予測サービスの活用などを推奨。エアコンや扇風

機を今のうちに掃除しておき暑い日にいつでも使用できるよう備えるとともに、暑熱順化の練習をしておくことなど呼び掛けました。

熱中症は、日中だけでなく夜間帯も注意が必要なことから、脱水の見分け方や、熱中症が疑われる症状、一般の人でも可能な初期対応法についても説明しました。親と同居中という参加者からは夜間帯にエアコンを消す・消さないで意見が分かれるといった悩ましい声も聞かれました。

銀杏アラカルト

◆クラブ活動の活性化目指して 学生と教職員のコミュニケーションを十分に図り、クラブ活動を活性化させていくためのクラブ部長顧問連絡会議が5月29日(水)、50周年記念館で行われました。約30のクラブの部長や顧問が出席。竹屋元裕学長のあいさつに続き、学生委員会のクラブ委員長を務める安田大典教授(リハビリテーション学科生活機能療法学専攻)が会議の趣旨を確認した上で、部室の管理などについて注意を喚起。学務課から後援会や学友会からの助成費とその使い方などについて説明がありました。最後に学友会執行部のクラブ担当長が、西里駅清掃などの学友会活動への積極的な参加を呼び掛けました。(入試・広報課)

◆2・3年次保護者会 看護学科3年次生、生活機能療法学専攻3年次生、言語聴覚学専攻2年次生を対象とした保護者会を5月13(月)～31日(金)、Webオンデマンド形式で開催しました。サイトには、学長挨拶、概況説明、学科長・専攻長挨拶、学外実習・就職・国家試験についての説明、大学院紹介を掲載し、多くの情報を届けることができました。また、希望者に対しては、SG担任との個別面談も実施しました。(就職・実習支援課)



オンラインを通じあいさつする竹屋学長

私の秘話
★
ヒストリー

宮崎 宣丞 助教

リハビリテーション学科
理学療法学専攻

鶴の一声を大切に？

私は佐賀県出身ですが、理学療法士の養成校は鹿児島です。鹿児島に行くきっかけは、センター試験翌日の1歳年上の兄からの電話でした。鹿児島と別の学校(学部は異なるが、兄の進学先)で迷っていた私に、「こっちに来るなよ。じゃあね～」と言い放って電話を切られました。だいぶ記憶が曖昧になってきましたが、私の鹿児島行きが決定した瞬間です。

そこから、鹿児島生活も4年目となり、学外実習を迎えました。実習施設の最終調整時に、先生から「実習担当

が熱心だから、〇〇病院に行ってみない？」と言われました。お任せしますと答え、実習がスタートして数日後、学校に書類を取りに行き先生に会うと、「〇〇病院は厳しいでしょ？ 頑張るね～」と言われました…。騙されたと思った気持ちは今でも忘れないですが、先生の予想に反して？ 充実した実習であり、私の最初の就職先になりました。

これからも、鶴の一声がもたらすちょっとしたチャンスを大切にしたいと思います。

週間行事予定（6月11日～6月17日）	
6/11（火）	令和6年度 第1回阿蘇プロジェクト 体力測定会 （開催場所：阿蘇中央高校）
6/14（金）	コンケン大学（タイ）さよならパーティー＆プレゼンテーション （12:10～ 1204・1205会議室）

来月6～7日 福岡市で日本栄養・嚥下療法学会学術大会

第10回日本栄養・嚥下理学療法学会学術大会が7月6（土）～7日（日）、福岡市の福岡国際会議場で開催されます。大会テーマは「つなぐ、究める、その先へ。」。講演会やシンポジウムでは、栄養理学療法、嚥下理学療法に明るい理学療法士のみならず、それにかかわる医師、歯科医師、言語聴覚士、栄養士、歯科衛生士、薬剤師といった多くの関連職種の方々にも登壇していただきます。

準備委員による各種作業はいよいよ追い込みの段階となり、現在、当日の受付方法など会場

運営の最終確認を行っているところです。栄養・嚥下理学療法は、理学療法の中ではまだマイナーな位置づけではありますが、この大会を期に、栄養嚥下にかかわるすべての方々の幸せづくりに貢献できればと思っております。

理学療法士以外の医療職の皆さんの参加も可能です。近しい先生方にも参加を促していただけますと助かります。よろしくお願いいたします。

（リハビリテーション学科理学療法学専攻 久保高明）